

## 配付資料

- 資料1 伊吹山自然再生協議会設置要綱、委員名簿
- 資料2 - 1 伊吹山の自然環境
- 資料2 - 2 伊吹山の歴史・文化
- 資料2 - 3 伊吹山の開発・利用の現状
- 資料2 - 4 伊吹山の自然環境の保全・再生施策の現状
- 資料3 伊吹山の課題（案）
- 資料4 今後のスケジュール（案）

- 参考資料1 伊吹山における自然再生の取組フロー図
- 参考資料2 伊吹山再生全体構想の骨子（案）



## 資料 2 - 1

# 伊吹山の自然環境

### 1. 位置

この全体構想の対象となる伊吹山は、滋賀県と岐阜県にまたがり、北は福井県の若狭湾に、南は三重県の伊勢湾に迫る本州で最も狭い部分の中央部に当たる。行政界としては、滋賀県米原市（旧伊吹町）ならびに岐阜県揖斐川町（旧春日村）、関ヶ原町および大垣市に属する。



## 2. 地形地質

伊吹山は標高 1377mの起伏山塊で、典型的な石灰岩地帯に属し、山頂にはカレンフェルト地形（石灰岩の墓石様地形）や巨大な石灰露岩が見られる。伊吹山の西側斜面は石灰岩の断層崖で「白じゃれ」「大富抜け」等の崩壊崖が見られ、石灰岩の採石が行われている。伊吹山南西斜面は傾斜が緩く、スキー場として利用されている。南斜面は急崖となっており、山脚部には扇状地を形成し、弥高、上平寺等の集落が形成されている。

伊吹山は滋賀県の最高峰であり、かつ周辺に高い山がないことから湖北のランドマークとなっており、四季を彩る美しい山容が広く県民から愛されている（例えば、平成 19 年の長浜市（米原市に隣接）での景観づくり市民アンケートでは、長浜らしさを感じる場所、長浜市にとって重要であると感じる場所として、「伊吹山が見える風景」が全体の 50.8%（430 件）を占めている。）。また、山の品格、歴史、個性に優れているものとして、1964 年に深田久弥氏により日本百名山の一つとして選ばれている。

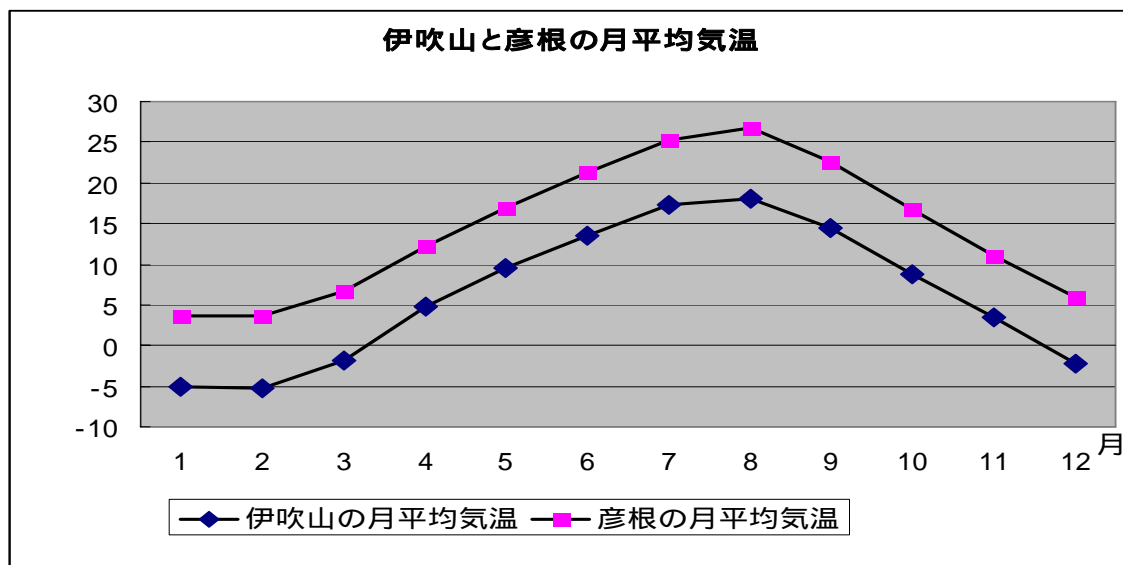


三島池からのぞむ伊吹山の雪景

### 3. 気象

伊吹山を南端とする美濃・越前山地稜線と中部山脈、丹波山地、鈴鹿山地に囲まれているため、特徴的な気候を示す。気温が低く降水量が多いうえ特に冬期に積雪が多い日本海気候区北陸型に属する。

伊吹山の月平均気温は8月で18.1、2月で-5.2である。下の図は伊吹山と彦根における月平均気温（統計期間1971～2000年）を比較したもので、伊吹山の気温は彦根に比べて年間を通して7～9低い。



冬は若狭湾からの北西風、夏は伊勢湾からの南西風の強い風が多い。風速は1～2月が最も強く約10m/s、7月が最も弱く約7m/sである。最大風速の記録としては、第2室戸台風（1961.9.16）による56.7m/sがある。他の山岳と比較して、高さの割に風が強いことが特徴である。また、伊吹山は一年を通じて霧が多く、山頂の霧日数は年間平均300.8日（1918～1988）となっている。

積雪は11月に始まり、2月が最も深くなりおよそ5mとなる。その後は減り始め、5月にはなくなる。積雪は年々の変動が大きく、倍ぐらいとなることも多い。最深積雪は1,182cm（1927.2.14）の記録があり、世界山岳観測史上1位となっている。

## 4. 植物相

### (1) 概況

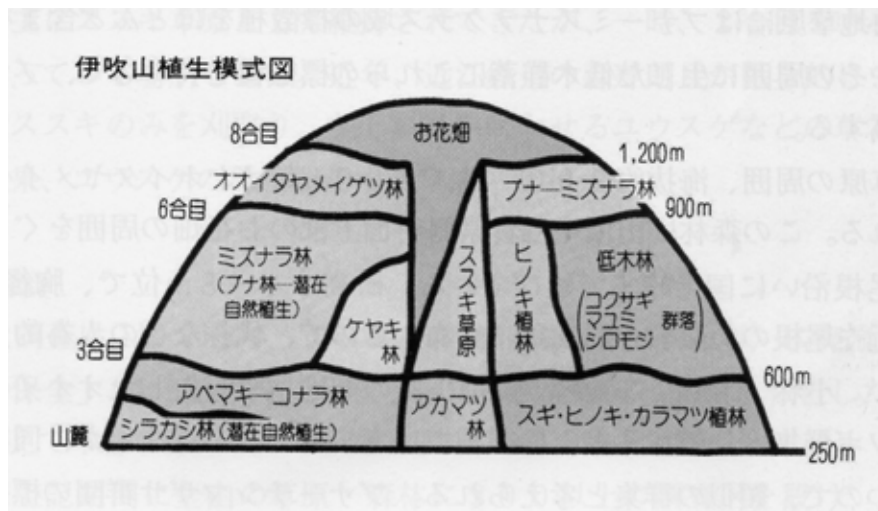
伊吹山には、滋賀県全域の生育植物（シダ植物以上の高等植物）約 2300 種類のうち約 1300 種類の植物が生育している滋賀県随一の植物の宝庫である。

山麓の海拔 300mまでに潜在自然植生としてのシラカシ林があるが、現在は面積的にはごくわずかしが残っていない。海拔 300～600mには、薪炭林として利用されてきたアベマキ・コナラ林、尾根筋のアカマツ林、スギ・ヒノキ・カラマツの植林などが見られる。

海拔 600～900mには、同じく薪炭林として利用されてきたミズナラ・コナラ林、谷筋のケヤキ林、ヒノキ造林地、伐採跡のコクサギ・マユミ・シロモジなどの低木群落がある。また、4 合目以下の山腹～山麓にあるスキー場付近にはススキ群落広がっているほか、花の美しいユウスゲ群落が見られる。

海拔 900～1200mには、石灰岩地特有のオオイタヤメイゲツ林が多く、場所によってはブナ・ミズナラ林が発達している。

海拔 1200m以上は、特殊な地質・気象条件から山地草原（お花畑）ができています。ただし、山頂の山小屋や測候所付近は、観光客に踏みつけられ、平地の路傍と同じようなオオバコ・スズメノカタビラ群落や裸地となっている。山頂の窪地など残雪の多いところでは、イブキザサ群落やチシマザサ群落が分布している。山頂の北西部および西側の尾根部の冬期季節風の強い風衝地で、石灰岩の露岩の多い場所では、低木を主とするイブキシモツケ群落が見られる。



## (2) 山地草原(お花畑)の特色

海拔 1200m以上の山頂部周辺および3合目から山頂にかけての登山道沿いの三角地帯(上記植生模式図参照)の山地草原(以下「お花畑」という。)は、メタカラコウ、オオバギボウシ、ショウジョウスゲ、サラシナショウマ、フジテンニンソウ、シモツケソウなどを優占種とし、約300種の温帯性および亜高山性の草本が生育している。コイブキアザミ、ミヤマコアザミ、ルリトラノオ、イブキトラノオ、クガイソウ、シュロソウ、アキノキリンソウ、リュウノウギク、イブキトリカブト、リンドウ、クサタチバナ、タムラソウ、カノコソウ、ニリンソウ、ショウジョウバカマ、サンカヨウなど春から秋にかけて美しい花を咲かせる草本が多く、7月から8月が百花繚乱の最盛期である。

この山地草原の主な成因としては石灰岩地で立地が乾燥しやすいことや冬期季節風の強い風衝地という高山的な気象条件が加わること、さらに近年まで田畑の肥料や家畜の飼料として、山頂から滋賀県側山麓にかけて盛んに採草が行われたことなどが挙げられる。

お花畑に生育する植物の特徴として、以下の6点が挙げられる。

### a) 固有種(特産種)の宝庫

コイブキアザミ・イブキヒメヤマアザミ・ルリトラノオ・イブキコゴメグサ・イブキレイジンソウなど9種の固有種(特産種)が見られる。これは、古い地層 古生代二畳紀 で覆われていること、乾燥しやすく森林が発達しにくい石灰岩地であること、中腹以上が冬期季節風の強い風衝地であることから、残存した種があったり、新種形成が行われたりしたためと考えられる。



コイブキアザミ

### b) 北方系要素の植物の南限

北方系要素の植物とは、地質時代の氷河期に、その発生地である北極周辺から樺太または千島列島を経て日本に入り、南下していったと考えられる植物である。多くの北方系要素の植物は、石川県の白山が南限となっているが、高山の少ない滋賀県ではほとんど分布していない。

しかし、伊吹山のお花畑には、イブキトラノオ・サラシナショウマ・サンカヨウ・コキンバイ・マルバダケブキ・イブキボウフウ・キバナカワラマツバ・メタカラコウ・キオン・イブキヌカボなど北方系要素の植物が生育している。特に、ゲンナイフウロ・ハクサンフウロ・エゾフウロ・イブキソモソモ・キンバイソウ・エゾハタザオ・イワシモツケ・ヒメイズイなどは、伊吹山が北方からの分布の西南限である。ニッコウキスゲも分布の南限に近い。



ゲンナイフウロ

c) 日本海要素の植物の存在

日本海要素の植物とは、日本海側の斜面で発生したり、そこを分布の本拠とした多雪地帯の植物をいう。積雪によって冬期の寒い季節風から守られるが、樹木では低木性になったり、伏状性となるものがある。伊吹山では、イブキトリカブト・スミレサイシン・ミヤマイラクサ・ハクサンカメバヒキオコシなどが多数生育している。



イブキトリカブト

d) 石灰岩地に適応した植物の存在

典型的な石灰岩地帯であるため、このような環境を好むイチョウシダ・ヒメフウロ・イワツクバネウツギ・キバナハタザオ・ヒロハノアマナなどの植物が見られる。また、イブキスミレは石灰岩地残存植物といわれ、近畿地方では伊吹山でしか確認されておらず、県のレッドデータブックにおいて絶滅危機増大種に指定されている。



キバナハタザオ

e) 襲速紀要素の植物の存在

襲速紀（熊襲、速水瀬戸、紀伊の略語）要素の植物とは、紀伊半島の櫛田川、紀ノ川、四国の吉野川、九州の八代と臼杵を結ぶ線以南すなわち西南日本の中央構造線以南の地域に分布の本拠を置く南方系の植物をいう。伊吹山にも、ギンバイソウ・ミカエリソウ・カキノハグサなどが、わずかであるが北上してきている。

f) 大陸系の植物の存在

前述の北方系要素の植物とあわせて、オケラ・タムラソウなど中国の東北部や朝鮮半島に分化発生の本拠をもつ温帯性の植物も見られる。また、ヒマラヤや中国大陸と共通して分布するマルバダケブキ・クガイソウなども生育している。



オケラ



これら山地草原群落を植物社会学的に群落区分すると、おおむね以下の8群落に分けられる。

- a . メタカラコウ群落
- b . オオバギボウシ - メタカラコウ群落
- c . オオバギボウシ群落
- d . オオバギボウシ - ショウジョウスゲ群落
- e . ショウジョウスゲ群落
- f . ショウジョウスゲ - イブキノエンドウ群落
- g . イブキノエンドウ群落
- h . フジテンニンソウ群落
- i . サラシナショウマ群落

その他、優占種からの区分では、アカソ群落、シモツケソウ群落、オオヨモギ群落と呼べるものもある。



メタカラコウ群落



シモツケソウ群落

### (3) 山地草原以外の特殊群落

#### a . オオイタヤメイゲツ - ミヤマカタバミ群集

滋賀県の石灰岩地帯に見られるオオイタヤメイゲツの優占する落葉樹林で、標高およそ900~1,300m間に生じ、土壌層の発達も悪いのでブナ林に替わって極相をつくっている。オオイタヤメイゲツの樹高は8m前後で、階層構造が発達し、令温帯性の樹種や草本、日本海要素の植物、石灰岩地に多い植物、固有種、稀産種、伊吹の山地草原の構成種などの宝庫になっている。本県、御池岳、藤原岳、霊仙山のオオイタヤメイゲツ林の中でも最も植物の多様性に富んだ貴重な群落である。

#### b . イブキシモツケ群落

伊吹山頂の平頂部の周縁の石灰岩の露岩の多い崖や急斜面で、海拔1,000m以上の風衝地に生ずる低木群落である。群落高は0.9~1.8mで、植被率は95%~100%、1調査区当たりの出現種数は11~28種あった。イブキシモツケ、ミヤマイボタ、ヒメウツギ、アカソがすべての調査区に出現した。イブキシモツケとヒメウツギが他群落にほとんど見られず、この群落を区分する種であり、林床には山地草原の構成種や石灰岩地に多い草本が生育するのが特徴である。

## 5 . 動物相

伊吹山に生息する動物でよく見られるのは、哺乳類としては、ニホンジカ・ニホンカモシカ・イノシシ・テン・ニホンイタチ・アナグマ・キツネ・タヌキ・ムササビ・ノウサギなどが挙げられる。また、ときどきツキノワグマも確認されている。

鳥類としては、11 目 28 科 4 亜科 62 種が確認されている。中でもよく見られるのは、キジ・トビ・ホトトギス・ツバメ・キセキレイ・ヒヨドリ・ウグイス・ヤマガラ・ホオジロなどである。食物連鎖の頂点に立つイヌワシ、クマタカも少数が見られる。

両生・爬虫類としては、シマヘビ・ジムグリ・アカジムグリ・アオダイショウ・シロマダラ・ヒバカリ・ヤマカガシ・ニホンアマガエル・ニホンアカガエル・ヤマアカガエル・タゴガエル・トノサマガエル・ツチガエル・ウシガエルなどである。

昆虫としては、12 目 114 科 444 種が確認されている。生物地理学的に北方系の種と南方系の種が混在しており、鱗翅目（蝶類）ではダイミョウミセリ・ヒメキマダラセセリ・コキマダラセセリ・キアゲハ・スジグロシロチョウ・モンキチョウ・オオウラギンスジヒョウモン・ウラギンヒョウモン・コムスジ・ヒメウラナミジャノメ、鱗翅目（蛾類）ではイブキスズメ・オオキンウババ・トガリアツバ・シロオビアツバ・スカシオビガ・ヘリクロテンアオシャク・クロマダラエダシャク・クロヘリノメイガが見られる。鞘翅目（甲虫類）では、ヒメボタル（別名イブキホタル）の重要な生息地となっており、7 月中旬頃から成虫が発光する姿が見られる。直翅目ではイブキスズ・イブキヤブキリ・イブキヒメギス、半翅目ではクロバアカサシガメ・フタモンウスキメクラガメ・スケバハゴロモ・イブキコガシラウカがよく見られる。

また、山頂部周辺においては、伊吹山固有種であり、県のレッドデータブックにて絶滅危機増大種に指定されているヤコビマイマイをはじめ、伊吹山地から鈴鹿山脈北部にかけての石灰岩地に固有なミカドギセルガイ、シリボソギセルガイをはじめ数多くの種類の陸産貝類が集中的に生息し、生育密度も比較的高い種が多く、全国的に見ても貴重な陸産貝類群集を育てている。また、複数の陸産貝類の種・亜種の基準産地となっている点からも、学術的に重要である。



ヒメボタル



ミカドギセル